# 文学芸術

## 芝居唄 全三巻

歌舞伎黒御簾音楽歌詞集成

郡司 正勝稿／浅原 恒男編著

B6判・平均500頁・49500円
三冊セット箱入り
文化資源社
978-4-910714-07-3
TEL.03-3557-3408

# 下座音楽への知見が無限に拡がる

### 下座音楽の唄の歌詞集、その全貌がここに！

児玉 竜一

音楽が呼び覚ますイメージというものがある。それはなにも抽象的なものではなく、例えばジョン・ウィリアムスの曲を思い浮かべてみればいい。冒頭の数小節だけで、鮫の恐怖や宇宙戦争、空飛ぶ自転車や復元された恐竜、魔法使いの子どもたちの学校が、脳裏に拡がるだろう。ことに多くはシリーズ化されて反復されているので、聴く者の意識や無意識にすり込まれている。これほど見事にいかずとも、おそらく多くの連続テレビドラマにおける主題曲は、この機能をめざしている。

歌舞伎に「下座音楽」と呼ばれる効果音楽がある。実は、めざすところはこれと同じである。もちろん、こちらの方が起源ははるかに古い。器楽だけで雰囲気を醸成する場合もあれば、唄が入って雰囲気を高めることもある。舞台に向かって左手の「黒御簾」とよばれる小部屋に、所せましと並んだ楽器（鳴物）と、唄、三味線が、生演奏で舞台上の役者の演技に呼吸を合わせる。

器楽だけの場合、聴く者の無意識にすり込まれた記憶がものをいう。たとえば幽霊の登場に演奏される「寝鳥」の笛やそれに付随する音楽のように、それが歌舞伎に由来することを知らずとも、ヒュードロドロという音を聴けば、多くの日本人が幽霊を想起することができる。きっかけがドラマかパロディーかコントかは知らないが、音と幽霊の出現の組み合わせがすり込まれた結果、両者を無意識に結びつける回路が形成されているのである。

唄が入る場合には、そもそも、その唄が何を言っているのか、聞き取ることができれば、そして何を意味しているのかを知ることができれば、受け取る効果は倍増するだろう。

ところが、この下座音楽で用いられる唄の歌詞集と言うものが、これまでなかなか存在しなかった。存在しなかったという言い方が正確でないとすれば、これまでの下座音楽に関する書物等では、全貌を容易に把握することができなかった。

例えば『歌舞伎下座音楽集成』（一九六一年）、『歌舞伎下座唄集成』（一九六九年）といったLPレコードが既に半世紀以上前に発売されており、前者はCDにもなっている。詳細をきわめたその解説書から学ぶところは大きく、レコードの構成・解説を担当した望月太意之助には『歌舞伎下座音楽』（一九七五年・演劇出版社）という基本文献もある。これに続く『上方下座音楽集成』（一九七五年）という、上方歌舞伎と上方落語に特化したLPもある。杵屋栄左衛門による私家版『歌舞伎音楽集成』も「江戸篇」（一九七六年）と「上方篇」（一九八〇年）を備えている。鳴物の側から五世福原百之助『黒美寿』（一九八三・私家版）もある。これらの多大な成果によって、下座音楽の全貌と構造、それに比例した実例の数々を知ることができる。だが、歌詞索引や歌詞集成といったものはないので、唄の側からの検索は難しかった。

ずいぶんと前置きが長くなったが、そこに登場したのが本書『芝居唄』全三巻である。これはもともと、一九八三年ごろに郡司正勝と須永朝彦監修で企画された『江戸音曲集成』という邦楽の叢書の一冊として準備されたものという。ところが、叢書自体の出版がお流れになったため、準備稿が宙に浮いてしまった。それを、日本俳優協会事務局長だった浅原恒男が中心となって、伝統歌舞伎保存会から文化庁の補助を受けた非売品として世に出したのが二〇二二年のこと。これは関係筋に配布されて、一般には知られなかった。

そこで、「別巻」として土田牧子・前島美保による「歌舞伎音楽関連文献資料目録」を増補して、文化資源社から決定版として公刊したのが本書となる。「歌舞伎黒御簾音楽歌詞集成」という新たな副題も、当を得ている。文化資源社を興した滝口富夫は、もと八木書店で多くの芸能関係書籍を手がけてきた仕掛け人でもある。

例えば、本年四月に歌舞伎座で上演された「於染久松色読販（おそめひさまついろよみうり）」、通称「お染の七役」の中に、「可愛がられた竹の子も」という歌詞の下座唄がある。なんだこの変な歌詞はと思っても、五十音順に並ぶ本書を閲すれば、これは長唄「月の巻」の一節であって、歌詞を最後まで辿ると竹の子の哀れな末路まで唄われること、他の芝居（河竹黙阿弥作「盲長屋梅加賀鳶」など）でも用いられることなどが、たちどころに分かる。

一事が万事、本書によって、下座音楽への知見が無限に拡がることが約束されるだろう。これらの唄の数々は、現行の舞台に登場するものをかき集めたほかに、これまで公刊された歌舞伎戯曲のありったけから拾い集めたと思しいものも含まれる。そのため、すべてが現在の舞台で聴けるわけではないが、逆に現在の舞台では上演されない演目の下座唄まで載っている。今後の復活狂言などにも有効活用されることだろう。元禄時代の芝居唄まで含まれているのも、そうした事情によるである。

もし、難点をひとつ挙げるとすれば、三冊の分売不可で計五万円に近くなる値段だろうが、そこは図書館の出番でもある。毎度申し上げる論法ながら、本書を備えているか否かで、その図書館の、歌舞伎関係の選書の本気度は、容易に占えることであろう。ウチは演劇関係は充実していますとおっしゃる図書館には、本書を備えずしてそのせりふはありませんぜと申し上げておきたい。

（こだま・りゅういち＝早稲田大学教授・日本演劇研究・演劇批評）

★ぐんじ・まさかつ（一九一三－一九九八）＝早稲田大学教授・歌舞伎研究者・演劇評論家。著書に『かぶき 様式と伝承』（芸術選奨文部大臣賞）など。

★あさはら・つねお＝社団法人伝統歌舞伎保存会事務局長、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会常務理事など歴任。一九四六年生。